

古サルデーニャ語における存在文の成立について*

金澤 雄介
(近畿大学)

1 はじめに

ロマンス諸語の所有文では、主にラテン語 *HABĒRE*、*TENĒRE* に由来する動詞が用いられ、所有者が主語、被所有物が目的語で標示される。所在文では、存在の主体（主語）は通常コピュラの前に置かれ、コピュラの後ろに場所を表す語句が置かれる。そして存在文では、ラテン語 *HABĒRE* / *ESSE(RE)* に由来するコピュラを用い、存在の主体である名詞（句）は通常コピュラの後ろに置かれる。所有文、所在文、存在文の形式的・意味的類似性は、ロマンス諸語だけでなく世界の言語において指摘されている (Freeze 1992 etc.)。本発表は、*Condaghe di San Pietro di Silki* (11 世紀) を資料として、古サルデーニャ語において所有文と存在文、あるいは所在文と存在文にどのような類似点があるかを示す。このような類似性をもとに、存在文は、所有文あるいは所在文における構造の再解釈によって生じたという見方がある (Bentley 2015, Ciconte 2015 etc.)。また、場所を表す代名詞クリティックが、具体的な場所を指示しない、広い意味での「存在」を表すマーカー (proform) としての機能を持つようになったことも存在文の成立に関与している (Bentley and Cruschina 2016 etc.)。本発表では、古サルデーニャ語において、存在文を特徴づける要素である proform が所有文、所在文にも観察されることに着目し、先行研究で主張されている存在文の成立過程の妥当性を裏付けることを試みる。

2 ロマンス諸語における所有文・所在文・存在文

本節では、ロマンス語学において所有文、所在文、存在文がどのように記述されてきたか、先行研究をもとに概観する。

2.1 所有文

ロマンス諸語における所有文には、主にラテン語 *HABĒRE*、*TENĒRE* に由来する動詞が使われる¹。この構文では、所有者が主語の標示を受け、数と人称において動詞と一致する。そして被所有物が直接目的語になる：

* このような前代未聞の社会的情勢にもかかわらず、発表の機会を与えてくださった理事の先生がたには感謝申し上げます。発表内容に関するご質問、コメント等は [y-kanazawa アット intl.kindai.ac.jp](mailto:y-kanazawa@intl.kindai.ac.jp) までお送りいただければ幸いです。なお本研究は JSPS 科研費（課題番号：19K00563）による研究成果の一部です。

¹ コピュラと前置詞、もしくは所有代名詞を使って所有を表すこともできる。この場合、被所有物が主語となり、所有者が前置詞句、もしくは属格の標示を受ける (Bentley and Ciconte 2016: 851) : *Ce livre est de moi.* / *Questo libro è mio.* 「この本は私のだ」

- (1) a. J'ai un livre. b. (Io) ho un libro. c. (Yo) tengo un libro.

「私は 1 冊の本を持っている」

現代サルデーニャ語では *auere* (< HABÈRE) を使うことが可能であるが、しばしば *tenere* と交替することがあるという (Pittau 2005: 93) :

- (2) Appo duos frades. / Tenzo duos frades. (id.)

「私には 2 人の兄弟がいる」

2.2 所在文

ロマンス諸語の所在文では、存在の主体（主語）はコピュラの前に置かれ、コピュラの後ろに場所を表す語句が置かれる。主語とコピュラの間で一致が生じる：

- (3) a. Les livres sont sur le bureau. b. I libri sono sulla scrivania.

c. Los libros están sobre la mesa. 「その本（複数）は机の上にある」

2.3 存在文

ロマンス諸語における存在文では、所在文と同様、コピュラが用いられる。ただし所在文とは構造が異なる。所在文では存在の主体（主語）は通常コピュラの前に現れるのに対し、存在文では存在の主体はコピュラの後ろに現れる。また、詳しくは後述するが、所在文では存在の主体とコピュラの間で義務的に一致が生じるのに対して、存在文では存在の主体とコピュラの間で一致が生じないことがある。このような特徴から、存在文における存在の主体は一般的な主語とは区別され、*pivot* と呼ばれる (Bentley 2015: 2 etc.)。

存在文では、*pivot* が存在する場所が前置詞句 (*coda*) によって表される。またフランス語の *il* や北イタリア方言の *u* のように、コピュラの前に虚辞 (*expletive*) が現れることもある。そして多くの言語において、*proform* と呼ばれるクリティックが現れる (フランス語 *y*、カタルーニャ語 *hi*、イタリア語 *ci* (*vi*)、サルデーニャ語 *bi*)²。以上をまとめると、ロマンス諸語における存在文の基本的な構造は (4) のように示される (Bentley 2017: 347-348 etc.) :

- (4) (虚辞+) (proform +) コピュラ+pivot (+ coda)

ここで、*proform* について詳しく見てみよう。*proform* は通時的に、場所を表す前置詞句の代名詞 (*locative clitic*) に由来する。代名詞であることから、前置詞句とは同一文中で共起することではなく、相補分布の関係にあった。(5) は Ciconte (2015: 241-242) の古トスカーナ方言の例である。(5a) は前置詞句 (*In quella Alessandria*) のみが観察され、(5b) では

² ルーマニア語、ポルトガル語などでは *proform* は現れない。またスペイン語 *hay* やガリシア語 *hai* のように、現在形でのみ *proform* がコピュラの後ろにつき、語彙化している例もある (Bentley 2017: 349-350)。

locative clitic (ci) のみが観察される。いずれも所在文であり、(5b) の locative clitic は、先行文脈に現れる場所を照応的に指示している：

(5) a. In quella Alessandria sono le rughe ove stanno i saracini. (Novellino, ix, p.25)

「あの Alessandria にはサラセン人たちが住んでいる通りがある」

b. Come ci è l'astore, così ci fosse lo 'mperadore. (Novellino, xxii, p.36)

「オオタカがそこにいるので、皇帝もそこにいる（ように見せかけよう）」

4 節で詳しく述べるが、locative clitic は文法化によって照応の機能を失い、より抽象的な「存在」を表す proform になった。その結果、前置詞句と共起可能になった (Bentley and Ciconte 2016: 855)。(6) に示した 14 世紀半ばのシチリア方言の例は、proform と場所が共起している存在文である：

(6) Sì ci fu in Sicilia grandi fami. (Conquesta, xviii, 3, p. 85) (Ciconte 2015: 244)

「シチリアに大きな飢えがあった」

存在文の別の特徴として、いくつかの言語では pivot とコピュラの間的一致が生じないことが挙げられる。冒頭でも述べたように、ロマンス諸語における存在文のコピュラは、ラテン語の HABÈRE に由来する動詞と、ESSE(RE) に由来する動詞が用いられる。HABÈRE を使った存在文では pivot とコピュラの間的一致が起こらず、常に 3 人称単数形が現れる。一方、ESSE(RE) を使った存在文では pivot とコピュラの間的一致が起こるのが一般的である (Bentley 2017: 351-352 etc.)³：

(7) a. Il y a beaucoup de livres. b. Ci sono tanti libri. 「たくさんの本がある」

一方、サルデーニャ語の存在文では auere と essere の両方が使われる。2 つのコピュラの使い分けには、pivot の定性が関与している (Bentley 2011: 114, Cruschina 2015: 56)。つまり auere は pivot が不定のときに使われ、essere は pivot が定数のときに使われる。(8) では、pivot である metas frores が不定であるため、at が用いられる。これに対して (9) では pivot である sos prattos が定数であるため、sun が用いられる⁴：

(8) B'at / ?sun} metas frores in sa tanca. (Cruschina 2015: 56)

「牧場にたくさんのお花がある」

(9) Bi {*at / sun} sos prattos in mesa. (id.) 「テーブルの上に皿がある」

またすでに述べたように、auere を使った存在文では pivot との一致が起こらず、essere

³ この一般化にはいくつか例外も見られる。ロマンス諸語における proform の有無、コピュラの選択および pivot との一致の有無は、Bentley (2017: 352) にまとめた表がある。

⁴ (9) のように、存在の主体がコピュラの後ろに置かれると、文全体がフォーカスの解釈を受ける。一方、所在文 Sos prattos sun in mesa. のように、動詞の前に置かれると、存在の主体がトピックの解釈を受けるといふ (Bentley 2011)。

を使った存在文では pivot との一致が起こる⁵：

(10) a. B'at / *an} tres pitzinnas. (Cruschina 2015: 56) 「3 人の子どもたちがいる」

b. Bi {sun / *est} sas pitzinnas. (id.) 「子供たちがいる」

3 観察

本節では、古サルデーニャ語文献 *Condaghe di San Pietro di Silki*⁶ を資料として、古サルデーニャ語における所有文、所在文、存在文の構造について記述する。

3.1 古サルデーニャ語における所有文

古サルデーニャ語における所有文では主に *auere* が使われる。(11) では、動詞に *aeuat* が使われ、被所有物 *maritu biuu* 「存命の夫」はその直接目的語である。文脈から判断して、*aeuat* の主語（所有者）は、直前の文に現れる *Nivata Tussia* である：

(11) *sos fijos de Niuata Tussia progitteu mi los leuas ki est ankilla intrega de scu.*
the sons of N. T. why me them take.2sg. who is slave entire of scu.
Petru, et aeuat maritu biuu, et aetilos fattos in forrithu cun Gosantine
P. and had.3sg. husband alive and have.3sg.-them make.pcpl. in fornication with G.
de Putholu? (349)⁷

de P.

「聖 *Petru* の完全奴隷である *Niuata Tussia* の子どもたちをなぜあなたは私から奪うのか。彼女は夫が生きているとき、*Gosantine de Putholu* と姦通によってその子たちをつくった」

次に、動詞の前にクリティックが現れる例を挙げる。(12) では、動詞に *aet* を用い、所有者 *alikus* 「誰か」が主語で現れ、被所有物 *kertu* 「訴訟」が直接目的語である。そして、*aet* の前にクリティック *ui* が見られる：

(12) *e ssi ui aet alikus kertu fijos meos li sian defensores.* (291)
and if PRO have.3sg. someone litigation sons my it may be.3pl. defenders

「そしてもし誰かが訴訟を起こせば、私の息子たちが（教会の）弁護人になるだろう」

(13) もクリティックが現れる類例である。*aeuan* は *Gosantine Latu* と *Ithoccor de Joscla* という、ふたりの主語に一致している。*sa terra* は *ki* によって関係節化されている *aeuan* の直接目的語である：

(13) *Conporaili a Gosantine Latu, et ad Ithoccor de Joscla, sa terra ki ui*
bought.1sg.-him from G. L. and from I. of J. the land which PRO

⁵ 現代サルデーニャ語では、*auere* と *essere* の使い分けと *pivot* の定性との間には、厳密な規則がない方言もあるという (Bentley 2011: 8)。

⁶ Soddu and Strinna (2013) による校訂本を使用する。

⁷ 古サルデーニャ語のテキストの末尾の数字は、*Condaghe di San Pietro di Silki* の節番号を表す。

aquean in su planu de Nurailo (261)

had.3pl. in the plane of N.

「私は Gosantine Latu と Ithoccor de Joscla から、彼らが Nurailo の平地に持っている土地を買った」

Cruschina (2015: 54)、Bentley and Ciconte (2016: 852) は、(14) のような現代サルデーニャ語の所有文に現れるクリティック *bi* を *proform* と解釈している⁸ :

(14) Non *b*amus máchina. (Bentley and Ciconte 2016: 852)

「私たちは車を持っていない」

(13) におけるクリティック *ui* は *locative clitic* ではなく *proform* であることは、前置詞句 *in su planu de Nurailo* と共起していることから支持される。2.3 で見たように、もし *locative clitic* であるならば、場所を表す前置詞句と共起することはできないからである。以上のような考察から、本発表ではこのようなクリティックは存在文に現れる *proform* と同一であると考えられる。

以上に見たように、古サルデーニャ語における所有文には 2 つのタイプがある。1 つは、*proform* をともなわない所有文、もう 1 つは *proform* をともなう所有文である⁹。

3.2 古サルデーニャ語における所在文

所在文にも、*proform* をともなわない例 (15) と、ともなう例 (16) がある。(15) は *furun* 以下は関係節になっており、その主語は *sas terras meas de Kitarone* である。(16) の *ui* は場所を表す *uue adterminauan su saltu* と共起しているので、*proform* と解釈できる :

(15) *et ego deilli sas terras meas de Kitarone ki furun in concas de*

and I gave.1sg.-him the lands my of K. which was.3pl. in basins of

Uaru (259)

U.

「そして私は *Uaru* の盆地にあった *Kitarone* の私の土地を彼に与えた」

(16) *Custos destimonios ui furun uue adterminauan su saltu* (9)

these witnesses PRO was.3pl. where confined.3pl. the land

「これらの証人たちは、彼らが境界を定めた領地にいた」

⁸ 所有文に *proform* がともなう事例は、イタリア語方言にも観察される (Bentley 2015: 105, Cruschina 2015: 54, La Fauci and Loporcaro 1997: 16) : 口語イタリア語 : (E) *ho du figlioli*. エミリア・ロマーニャ方言 : *A ho du fiul*. ヴェネト方言 : *Co do fiò*. 「私には 2 人の息子がいる」

⁹ このほかにも、*essere* と前置詞句および所有代名詞による所有文や、他動詞 *tenere* を使った所有文が観察されるが、本発表では割愛する。

3.3 古サルデーニャ語における存在文

2.3 でも述べたように、サルデーニャ語には **auere** を使った存在文と、**essere** を使った存在文の両方が存在する。本節では、古サルデーニャ語における存在文の構造を分析する。その上で、存在文と所有文、所在文の構造を比較し、構造的な類似性を示す。

3.3.1 **auere** を使った存在文

本節では **auere** を使った存在文の構造について考察する。古サルデーニャ語における **auere** を使った存在文の特徴として、**pivot** は不定の名詞句であること、動詞と **pivot** の間の一致はなく、常に 3 人称単数形が用いられることが挙げられる。(17) は、コピュラ **aueat** が **proform** の **bi** をともなっている。**pivot** である **bacante** 「空白」は文脈から考えて不定の名詞であり¹⁰、コピュラの後ろに現れ、その後ろに場所を表す前置詞句をともなっている：

(17) *et non **bi** aueat bacante in su condake uetere de scu. Petru de Silki uue*
and not PRO had.3sg. space in the condaghe old of scu. P. of S. where
lu ponne (347)

it register.inf.

「そして **St. Petru** の古いコンダーゲには、それを記録するための空白がなかった」

(18) は存在文とも所有文とも解釈できる、両構文の中間的な特徴を持つ例である。つまり、**binia** 「ぶどう畑」と **pumu** 「果樹園」を **pivot** とする存在文と捉えることもできるが、**aueat** は **proform** をともなう他動詞で、**cComita Pagiti** を主語、**binia** と **pumu** を目的語とする所有文と捉えることもできる：

(18) *Conporaili a cComita Pagiti sa binia de cuniatu de Tussia, e*
bought.1sg.-him from C. P. the vineyard of cultivated land of T. and
*binia e pumu cantu **ui** aueat* (153)

vineyard and orchard as many as PRO had.3sg.

「私は **Comita Pagiti** から **Tussia** の耕作地のぶどう畑と、{あるだけの／彼が持っていた} ぶどう畑と果樹園を買った」

3.3.2 **essere** を使った存在文

本節では **essere** を用いた存在文について記述する。少なくとも *Condaghe di San Pietro di Silki* では、**essere** を使った典型的な存在文 (**pivot** がコピュラの後ろに置かれる) は観察されなかった。(19) では **furun** 以下は関係節化され、**pivot** は定性を持つ **sos homines** である。したがってコピュラに **essere** が用いられ、**pivot** との一致が見られる：

¹⁰ 古サルデーニャ語では不定冠詞 (**unu, una**) が現れることが少なく、無冠詞の名詞句も多い。よって名詞句の定性は文脈から判断しなければならないこともある。

(19) *Et issu maiore accordaisse cun sos homines kantos* u *furun*
and the mayor agreed.3sg.-refl. with the men as many as PRO was.3pl.

in sa corona (358)

in the court

「そしてその役人はその法廷にいたすすべての人たちに同意した」

しかしながら (19) は、3.2 の (16) と同じく、**proform** をともなう所在文とも解釈可能である。このように、所在文に **proform** が現れることと、存在文の **pivot** として定の名詞句が可能であることが、両構文の類似性を引き起こしている。

4 所有文と所在文における再解釈と、**proform** への文法化

3.3.1 と 3.3.2 で、存在文と所有文、存在文と所在文の間にはそれぞれ構造的な類似性が観察されることを示した。このような類似性をもとに、ロマンス諸語における存在文は所有文と所在文における構造の再解釈によって形成されたという見方がある (Bentley 2015: 151-152, Ciconte 2015: 231, Cruschina 2015: 53-54)。つまり、**auere** を使った存在文は、所有者が明示されず、被所有物のみが目的語として現れるような所有文における再解釈(目的語が **pivot** として再解釈される)によって成立したという見方である¹¹。同様に、**essere** を使った存在文は、場所が明示されず、存在の主体のみが主語として現れる所在文における再解釈(主語が **pivot** として再解釈される)によって成立したという。そして、明示されなくなった所有者および場所に代わって、**proform** が現れるようになったと想定している。

3 節でも少し述べたように、本来は場所を照応的に指示するクリティック (**locative clitic**) が、具体的な場所を指示しない、広い意味での「存在」を表すマーカー、すなわち **proform** に文法化したことも存在文の成立の要因とされている。所有文に現れる **proform** について、Bentley and Ciconte (2016: 852) は次のように述べている：

“This clitic has been analysed as the marker of a copular construction with a noun phrase which is, at the same time, an argument and the predicate in the clause, or as the marker of an abstract argument which locates the possessive predication in space and time.”

つまり、所有文に現れるクリティックが、コピュラ構造(存在文)のマーカーとして再解釈され、所有文の述部(被所有物 = **pivot**)を空間と時間(今、ここ)に位置づける抽象的なマーカーとして再解釈されたと指摘している。

しかしながら、先行研究において、所有文と所在文における構造の再解釈、とくに文法化した **proform** が存在文の成立に関与していることを示す通時的な言語事実は示されてい

¹¹ Heine and Kuteva (2002: 241) では、所有の **have** が存在を表すようになる文法化の事例が挙げられている。同じように Heine and Kuteva (2002: 99) では、場所を表すコピュラが存在を表すようになる文法化の事例が挙げられている。

ない。3 節において、古サルデーニャ語では **proform** が所有文と所在文に観察されること、所有文と存在文、および所在文と存在文の中間的な特徴を持つ例があることを見た。このような事例は、先行研究で想定されている存在文の成立過程を裏付けるひとつの実例であるといえる。

5 まとめ

本発表では、古サルデーニャ語における存在文について、構造的に類似した特徴を持つ所有文・所在文と合わせて記述をおこなった。先行研究において、存在文は所有文および所在文における構造の再解釈、および **proform** への文法化によって成立したと主張されてきたが、その具体的な言語事実は示されていなかった。古サルデーニャ語における、所有文と所在文に **proform** がともなう事例は、先行研究が主張している存在文の成立過程の妥当性を支持すると考えられる。

[今後の課題¹²]

- ほかのロマンス諸語における、存在文と所有文、存在文と所在文の構造的類似についての考察
- 所有文と所在文の類似点と相違点についての考察。とくに情報構造に関する相違が不十分である
- 古サルデーニャ語における別の **locative clitic** である **inde** の機能・性質について、**ui** と比較しながら記述する

参考文献

- Bentley, Delia (2011): "Sui costrutti esistenziali sardi. Effetti di definitezza, deissi, evidenzialità" *Zeitschrift für romanische Philologie* 127/1 111-140.
- Bentley, Delia (2015): "Predication and argument realization" Delia Bentley, Francesco Maria Ciconte, and Silvio Cruschina (eds.) *Existentials and Locatives in Romance Dialects in Italy*. 99-160. Oxford: Oxford University Press.
- Bentley, Delia (2017): "Copular and existential constructions" Andreas Dufter and Elisabeth Stark (eds.), *Manual of Romance Morphosyntax and Syntax*. 332-366. Berlin: Walter de Gruyter.
- Bentley, Delia and Francesco Maria Ciconte (2016): "Copular and existential constructions" Adam Ledgeway and Martin Maiden (eds.) *The Oxford Guide to the Romance Languages*. 847-859. Oxford: Oxford University Press.
- Bentley, Delia and Silvio Cruschina (2016): "Existential Constructions" Susann Fischer and Christoph Gabriel (eds.) *Manual of Grammatical Interfaces in Romance*. 487-516.

¹² 有益なデータや情報をお持ちの先生がいらっしゃれば、ぜひご教示いただければ幸いです。

Berlin: Walter de Gruyter.

Ciconte, Francesco Maria (2015): "Historical context" Delia Bentley, Francesco Maria Ciconte, and Silvio Cruschina (eds.) *Existentials and Locatives in Romance Dialects in Italy*. 217-260. Oxford: Oxford University Press.

Cruschina, Silvio (2015): "Patterns of variation in existential constructions" *Isogloss* 1, 33-65.

Freeze, Ray (1992): "Existentials and other locatives" *Language* 68, 553-595.

Heine, Bernd and Tania Kuteva (2002): *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

La Fauci, Nunzio and Michele Loporcaro (1997): "Outline of a Theory of Existentials on Evidence from Romance" *Studi Italiani di Linguistica Teorica e Applicata*, anno XXVI, 1997, numero I. 5-55.

Pittau, Massimo (2005): *Grammatica del sardo illustre*. Sassari: Carlo Delfino.

Soddu, Alessandro and Giovanni Strinna (eds.) (2013): *Il Condaghe di San Pietro di Silki*. Nuoro: Ilisso.